

Why study culinary expressions?

レシピをもとにジャンルと文法について考える

野中大輔

認知文法・使用基盤モデルにおける文法とジャンル

ジャンルによって使用されやすい表現（語、言い回しなど）が変わるという点に異論はないだろう¹。しかし、このような事実を文法研究の中にどう位置づけるかについては、研究者の間で意見が分かれている。認知言語学者の間でも、文法はジャンルから独立していると考えられる研究者（高橋 2010）もいれば、ジャンルごとに異なる文法が存在すると考える研究者（Iwasaki 2015）もいる。こうした見解の相違は、言語（知識）に対する考え方の違いに由来するのだろう。そうであるなら、この種の問題に踏み込む際は自身の言語観（あるいは「言語知識」観）を表明することが必要であると言える。本発表では、認知文法・使用基盤モデルからすると、ジャンルと文法の関係についてどのような見方をすることになるのかを示す。事例として取り上げるジャンルはレシピである。

まず、認知文法の言語観（Langacker 2008）を概観する。言語表現に繰り返し触れると、人間はその表現の間に共通性を見出す。共通部分として抽出されたものはスキーマ（schema）と呼ばれる。スキーマのサイズや抽象度は様々であり、たとえば、give という語レベル、二重目的語構文 [V NP NP] のような統語構文レベルはもちろん、give me a ride のような言い回し（具体性の高い下位レベルの構文）なども含まれる。スキーマのうち、話者の頭の中で定着した言語単位はユニットと呼ばれる。ユニットとして数多くの表現を身につけることで、自然で流暢な言語使用が可能になる。ユニットは個人が身につけるものであるが、話し手と聞き手の間で習得されるユニットが完全に異なるということではなく、スピーチ・コミュニティの間で広く共有されている表現、つまり慣習化している表現もまた多いはずである。これらの側面を重視することから、認知文法では「慣習的な言語ユニット」（conventional linguistic unit）という用語が採用されている。慣習的な言語ユニットは、話者の頭の中に無秩序に蓄えられているわけではなく、そこには規則性が見出されたり、ユニットの間に全体・部分の関係が結ばれたりしていると考えられる。認知文法にとっての文法とは、このような知識の総体である。

ユニットについて重要なことは、それが実際の言語使用（使用事象 usage event）から抽出されるという点である。認知文法が使用基盤モデルを名乗るのは、この点を重視しているからである。使用事象に含まれる情報は、どんなものであってもユニットの一部となりえる。したがって、各種ユニットには、典型的な生起環境や現れやすい文脈、伴いやすいジェスチャーなどといった情報が含まれることになり、ジャンルもその一部に位置づけられる。そして、ジャンル知識自体も慣習的な言語ユニットの一種であることに注意された。認知文法における「ジャンル」とは、どんな媒体で、どのような話題が、どのような表現で語られるかといったことに関する知識のまとまり（スキーマの集合体）のことである（Langacker 2008: 478）。

上の説明からわかる通り、文法知識もジャンル知識も慣習的な言語ユニットの一側面として扱われる。認知文法・使用基盤モデルに基づく文法研究を実践するには、ジャンルごとに異なるディテール豊かな言語単位を分析していくことが求められる（野中 2021b）。

事例研究：レシピと場所格交替

文法とジャンルの関係を考える上で、レシピは興味深いデータを提供してくれる。ここでは野中（2017, 2021a）で扱った場所格交替（locative alternation）の事例研究を紹介する。場所格交替とは、John sprayed paint on the wall. / John sprayed the wall with paint. のような、移動物を目的語に取る構文（移動物目的語構文）と、影響を受ける場所を目的語に取る構文（場所目的語構文）の間に見られる交替現象である。

場所格交替とレシピの関係を考える上で興味深いのが、交替しないとされている動詞（非交替動詞）の交替例がしばしばレシピで見つかるという指摘である。Pinker（1989）は、brush, smear といった塗り付けを表す動詞や spray, sprinkle などの散布を表す動詞は交替可能であるが、dribble, drizzle のような液体を滴らせることを表す動詞は場所目的語構文で使用できず、交替不可であると述べている。それに対して、Iwata（2008）はレシピでは dribble, drizzle などが場所目的語構文で見つかることを報告し、こうした動詞も実際には交替可能であるとしている。実際のところ、dribble や drizzle の交替例はどの程度見つかるのだろうか。

野中（2017, 2021a）は英語の料理本 3 冊から Pinker が挙げた動詞（交替動詞、非交替動詞）の用例を集め、以下の結果を報告している²。(i) レシピで場所格交替の 2 通りの構文での使用例が見つかった動詞のうち、使用例が多かった動詞を上から順に 4 つ挙げると sprinkle (振りかける), brush (刷毛で塗る), drizzle (垂らす, かける), rub (すり込む) となる。(ii) 上位 4 語のうち rub を除いて場所目的語構文での用例が多い³。以下に実例を挙げる。目的語が省略されている場合に Ø の表記を用いて引用した⁴。

- (1) Sprinkle the remaining cheese over the top. [sprinkle : 移動物目的語構文]
- (2) Drizzle balsamic into extra oil in serving bowl. [drizzle : 移動物目的語構文]

- (3) Arrange the lettuce leaves on 2 plates and top with the feta, tomatoes and olives. Drizzle Ø with olive oil and sprinkle Ø with pink peppercorns. [drizzle, sprinkle : 場所物目的語構文]
- (4) Brush loaves lightly with a little extra oil. [brush : 場所目的語構文]

この調査結果で強調しておきたい点として、まず、そもそもレシピには sprinkle や brush のような交替動詞がよく見られることが挙げられる。sprinkle などの動詞を記述する際は、このような情報を含めることが必要だろう。そして、注目すべきは、drizzle が場所目的語構文で見つかるというだけでなく、むしろ場所目的語構文での使用例のほうが多かった (57%が場所目的語構文) という点であり、レシピにおける drizzle は交替動詞として慣習化していることが確認できる。

この種の drizzle がいつごろから使用されているかを調べるために、野中 (2021a) は Corpus of Historical American English (Davies 2010-) で 1900 年から 2009 年までの drizzle の用例を検索した (品詞を動詞に限定し、すべての活用形を検索)。その結果、1980 年代までは It's drizzling. のような雨が降ることを表す例が多かったが、1990 年代から料理動詞としての用例が増え始めていることがわかった。1990 年代には移動物目的語構文と場所目的語構文の用例が 14 例/5 例だったのに対して、2000 年代では 17 例/26 例となっており、用例数が逆転している。2000 年代になって料理動詞としての drizzle は交替用法が慣習化したと考えることができる。

レシピにおいて drizzle の交替用法が慣習化するにあたっては、sprinkle のような既存の交替動詞からの類推が果たす役割が大きかったのだろう。一方で、3 冊の料理本を見た範囲では dribble は 1 度も用いられていなかった。野中 (2021a) はさらに調査範囲を広げ、合計で 12 冊の料理本を観察したが、このうち dribble を使用しているのは 1 冊のみであった。ただし、この 1 冊ではどちらの構文も用いられており、この著者は交替用法をユニットとして身につけているようである。drizzle, dribble はどちらも液体を垂らすことを表す動詞であるが、前者は交替動詞として慣習化しているのに対し、後者は慣習化するまでには至っておらず、一部の著者が使うにとどまっている。同じような意味の動詞だからと言って同じような用法の拡張をすることは限らないのである (このような言語事実に向き合う姿勢については、西村・野矢 (2013: 194–200) の議論を参照)。

以上の事例研究から、場所格交替のような文法現象を解明する上で、ジャンル情報を考慮することの重要性を示すことができたのではないかと思われる。場所格交替が特殊な文法現象なのではなく、どんな文法現象を扱う場合であっても、〈レシピで用いる drizzle の場所目的語構文〉のような慣習的な言語ユニットが存在する。認知文法・使用基盤モデルは、このように現象の分析を重ねながら、言語知識の解明を目指す。

【主要参考文献】 Biber, D. and S. Conrad (2009) *Register, genre, and style*. Cambridge: Cambridge University Press. / Brown, G. and G. Yule (1983) *Discourse analysis*. Cambridge: Cambridge University Press. / Davies, M. (2010-) *The Corpus of Historical American English: 400 million words, 1810-2009 (COHA)*. Available online at <<https://www.english-corpora.org/coha/>>. / Iwasaki, S. (2015) A multiple-grammar model of speakers' linguistic knowledge. *Cognitive linguistics* 26(2), 161–210. / Iwata, S. (2008) *Locative alternation: A lexical-constructional approach*. Amsterdam: John Benjamins. / Langacker, R. W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press. / 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』東京：中央公論新社。 / 野中大輔 (2017) 非交替動詞が交替するとき：類推と文脈から見る構文の生産性。 *Human linguistics review* 2, 47–63. / (2021a) 認知言語学の観点から見た英語の構文選択：捉え方の意味論と使用基盤モデルに基づく場所格交替の分析。東京大学、博士論文。 / (2021b) 話し手と聞き手の姿、見えていますか？：ジャンルについて考える意義。『英語教育』2022 年 1 月号, 62–63. / Pinker, S. (1989) *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge, MA: MIT Press. / 高橋英光 (2010) 『言葉のしくみ：認知言語学の話』札幌：北海道大学出版会。

¹ 「ジャンル」 (genre) と「レジスター」 (register) などの用語を使い分けている研究 (Biber and Conrad 2009 など) もあるが、本発表ではそのような用語の使い分けはせず、「ジャンル」をディスコースのタイプを指す総称的な用語として用いる (一般的な「ジャンル」の使い方とほぼ同じである)。

² 使用した料理本は [a] *English Traditional Recipes* (Herms House, 2014), [b] *How to Cook Step-By-Step* (Octopus Publishing Group, 2013), [c] *500 Quick and Easy Recipes* (Iglloo Books, 2014) の 3 冊 (イギリス英語) である。Pinker の挙げた動詞を場所格交替の 2 つの構文に分類し (場所格交替以外の用法は除外)、構文ごとの用例数と目的語省略の数を集計した。集計数など詳しくは野中 (2017, 2021a) を参照。例文 (1) は [a], (2) と (4) は [b], (3) は [c] から引用した。他にも pile, scatter, spread などの交替動詞の例が見つかる。

³ rub には、rub the butter into the flour (または rub in the butter) という決まった言い方があり、この用例が多いことで移動物目的語構文の割合が高くなっている。

⁴ レシピは目的語の省略が起こりやすいジャンルであることが知られている (Brown and Yule 1983)。野中 (2017, 2021a) は移動物目的語構文よりも場所目的語構文で省略が多く見つかることを報告し、機能的な観点から目的語省略の分析を行っている。